

架空対談 吃音—吃音者とは？

まえおき

「吃音—吃音者とは？」という同じ標題で文を書いたことがあります。書いている途中で、ノートのまとめることに重心を置いてしまったこともあったのですが、分かりずらいと不評でした。もう一度全面的に書き改めると予告していたのですが、同じ書式で書いても同じ結果に陥りそうで、思い切って「架空対談」という形で文を進めようと思います。かえって論理性が希薄になり、論理的に詰めていく人には分かりにくくなるということも恐れますが、こなれた文になることで幾分でも分かりやすくなることを期待して。

「対談」の内容は私の内なる対話ですが、自己内の歴史的経過でK↓T↓Mとしてたどり、「対話」したいと思います。(M)

K 今日私は私が一番若輩ということで司会を担当することになりました。私が理論的に蓄積が最も少ないということで、聞き役ということでの司会ということで、宜しくお願いします。

この討論に入る前にその前提的なこととしてMさんの「吃音—吃音者とは？」を読んでたたき台にしようというTさんの提起があったのですが、読んでいてさっぱり分からない。分からないということは私が理論蓄積がないということで、それは素直に認めるのですが、そもそもなぜあのようなこねくり回したような理論が必要なのか分からないのですが、その辺から展開してもらいたいのですが？

M こねくり回している、と言われるのは心外ですが、そのような理論は必要ないとKさんは思われる訳ですね？

K 理論が一般的に必要なでないとは思いますが、あのような理論が何故必要なのかと？

M あのようなとは？

K 「吃音はあるのか、否か？」というような問い掛け、それについての論攷。もし、吃音がないとしたらここで議論する必要もない。

M (笑い) それについては後に応えるとして、……。Kさんも差別という視点があると思うのですが、その上で、そのような問い掛けを抜きにして、吃音者の反差別の運動が成立しえるという判断があると思うのです。その辺のところを展開して貰いたいのですが？

K 私は今日は聞き役の積もりだったのですが、……。私は反差別の基本的姿勢は、人それぞれに被差別事項をもっている訳で、「他者を差別することは自分が差別されることを許すことだ」「自分が差別されるのが厭だから他者を差別しない」ということで足りる、と思います。T 実に素朴な反差別論ですね。私も素朴さは好きですが……。今、人はそれぞれに被差別事項を持っていると言いました、そのような共通認識があると思う？

K あると思いますよ。皆、何かしらのコンプレックスを持っている。

T コンプレックスと被差別事項—スティグマということは違う。コンプレックスの場合

は被差別の普遍性を持たないことがある。そもそも差別ということのとらえ返しがあれば、それこそこんな議論は必要ない。(笑い) 例えば、障害者問題で、誰でも障害者になる可能性とか、年をとれば障害者になるのだからという議論をする人がいるのだけでも、そのような論理は通用しない、人はもっと現実主義的で、というより、そこまで考えるゆとりを持ちえない。

M 「人は・・・」という表現には語弊がある。

T 現代人の多くは、ということだけれども、それにそもそも他者を差別する者は自分が差別されることを許すことになる、という論理は、因果報応ということだろうけれど、現実にはそうってはいない。

例えば、ぶっちゃけた言いかたをすれば、この社会は「セニ・モノ」の社会でゼニを持っているということで、そのことを巡る差別で、少なくとも一定は自分が持っている被差別事項をあがなえる。

M 「あがなう」という表現はむずかしいですね。私は逆に被差別者が社会的に「高い」地位にある時に、被差別事項に対する、コンプレックスは逆に大きくなる場合があると思う。けれども、他へ転化しうる構造を持っているし、自分の地位を守るという心理機勢が働いて、「他の」差別を見詰めようとしないう、又個人的に「解決」しようとしたりする、そこで反差別のポテンシャルは高くない、ということになると思う。決して被差別事項が消えてしまう訳ではないが、先程、Kさんのあげられた命題が受け止められなくなる、と思います。

T 話を戻しますが、私は先程Kさんの論理は倫理主義だし、人権論につながる論理ではないと思う。

K Mさんが「吃音一吃音者とは？」の中で人権論の批判をしているのだけれど、あれも、よく理解できない。T 誰の言葉がよく覚えていないけれど「倫理主義とはテロリズムへの通路である」という名言がある。ファシズムには倫理主義がついて回る。奇麗事を言われる時は、倫理とか道徳が通用するけれど、そもそも道徳、倫理を問題にする人は、啓蒙主義的な考えがあって、人の意識を社会的関係性から切り離し、そのことを抜きにして変ええるという幻想を振り撒く。そして差別に関しても「差別などない、気持ちの持ちかたが悪いから差別という有りもしないことを・・・」という論理になる。そこまでいなくても、往々にして、気持ちの持ちかた変えようという論理になる。そのような論理は危機的時代にはふっとんでしまうか、ファシズムの流れに巻き込まれてしまう、巻き込まれてしまうだけではなくファシズムの芽になることだってあるのではないか。

M ファシズム論は今日の主題ではないので、話を戻しませんか？

K では話を戻して、「吃音は、あるのか、否か？」という問い掛けが何故、必要なのかという、ところからMさんの展開を・・・。

M それは戻し過ぎです。人権論のあたりから議論しましょう。Kさんは人権論をどう思いますか？

K おかしいなあ。今日は聞き役だと安心していただけなのに、まるで口頭試験を受けているようです。(笑い)

人権論が資本主義と共に生まれたという指摘、そしてその中に資本主義の論理を内包しているということは、それはそうだと思います。

けれども民主主義ということと同じで、例えばブルジョア民主主義とプロレタリア民主主義と同じことで、プロレタリア民主主義は有効性を持つと思う。

そういうものとして、人権論も有効性をもつのではないかと・・・。

T 人権論は資本主義の論理を内包しているのではなく、資本主義の論理そのものではないかと思う。プロレタリア民主主義などという概念は理解できない。

K でも人権論は、反差別として有効性を持つ。

T 君のいう有効性とは大衆的に広く浸透しているという意味ではないか？確かに浸透しているのは事実だ。それは当然で、資本主義の論理だから、資本主義の社会で浸透する。

K でも利用できるものは利用すればよい。

T そもそも利用できないと思う。

K 現実に利用している。

T それは、その運動がブルジョア民主主義のワクを越えていない段階で有効性をもつ。それを越える、越えようとするとき、かえって桎梏になる。

M Tさんの人権論批判を内容的にもっと展開してもらったら、話がかみ合うと思います。

T 人権論というのは、労働力の商品化を背景にして、標準化された労働力という範疇で、人は皆同じということとなりたっている。その場合、そもそも何故、ブルジョアジーとプロレタリアという差別があるのか、ということを捨象している。

K では問題は、人権論をいかに徹底化させるということではないか。

T そのようなことにはならない。そういう場合に個々の違い、例えば努力の違い、能力の違いがあり、そこから違いが生じたとされる。そして最初の違いにそれ相当の対応をしないことは逆に差別だ、という論理になる。基本的人権は同じだけれど、努力や能力の違いから差異が生じたとされる、それが人権論ではないか？このような論理は今の社会の中で浸透しているので、説明するまでもなく、説明していてムカつく論理だけれど・・・。僕等はそれに対して、人は皆違うのだ、違うという前提にたって、人が協働する動物であるという前提にたって、人が互いに違いを認めあっていかなる共同性をつくりあげていくのか、と問題をたてるべきだと思う。それが共生という言葉で今日的に語られていることだと思う。人権論の「人はみな同じだ」、という論理では、違うという現実的意識が起きてきた時に、それに答え切れないし、差別の論理に陥る。そもそも労働力の価値を巡る差別の問題を差別ととらえられなかった歴史性もある。人権論の「人は皆同じだ」というワク組み自体が間違っていると思う。

M 先程、「僕等」という表現があったけれど、その中には私も入っているの？

T えっ？

K 今の論理はそれこそ倫理主義ではないですか？

T 何が倫理主義？

K 「人類皆兄弟」という題目の下に差別のない社会を作ろう、という倫理主義以外のなものでもない。

T なんで右翼の思想性と反差別の思想性が同じになるわけ？

K 右翼だって反差別を唱えることがある。あなたはプロレタリア民主主義を否定した。その論理でいくと、倫理主義にだって区別はなくなる。

M ちょっと待って。また話がずれそうなので、元に戻しましょう。Tさんの言っているのは、障害者運動に引き寄せて言えば「障害個性論」的な内容だと思うのですが、どうでしょう？

T ええ、そうですよ。

M 「障害個性論」が出てきたことの意味は、人権論は同じということで違いということを問題にしえなかった。違いということは明々白々だから、そのうえに立って、互いの違いを認め合おう、ということだと思います。

その辺のことをKさんは同じ倫理主義だと評価されたのですが、倫理主義ということとは違うと思います。倫理主義というのは、現在の社会がゲゼルシャフトの社会（利害社会）ということを含象して、意識の啓蒙的変革によって問題を解決しようとしています。だから現在の社会のワクぐみを変えたくない、という立場—利害の人々には、差別は倫理の問題なのですが、社会の根底的変革の立場ということでは利害の問題だし、倫理主義的ではない。「障害個性論」は一樣、現代社会へのアンチ的というか、居直りの立場にあるわけですから・・・。

尤も、「障害個性論」と言っても、色々あるので、その中身の検討が必要ですが、・・・。

実を言うと、私もついこの間まで「障害個性論」的立場をとっていました。でも最近なんだかおかしいと思っています。

認識論的に言えば、「個性」という概念自体が問題になります。そのことは後で展開しようと思うのでさておき、「障害個性論」というのは命名判断の段階をさておき価値判断のほうをなんとかしよう、ということだと思います。水平的排除は差別とは言えない、問題は垂直的排除だ、ということと同じです。異化ということは差別ではない、それに価値判断がくだされる時、差別になるということだと思います。

しかし問題は、命名判断と価値判断の区別は論理的抽象としてあり、明確に区別しえない、命名判断は価値判断を懐胎しているということ、違いを違いとして認める、という時に価値判断が付帯している「違い」から価値判断を削り落とす、というような論理に陥っています。そのようなこと現実にはできないのですが、それが意識を関係性から切り離れた論理になっています。それがKさんの言われる「倫理主義」に陥る根拠になります。「倫理主義」というより、「意識変革主義」と言った方が妥当だと思いますが、・・・。その辺は唯物史観の共通認識があると思いますので、これ以上踏み込みません。

K 共通認識と言われても余り自信はないです。

M それについてもどこかで問題にあがると思いますので、話を先に進めましょう。

問題は、何故「違い」として浮かび上がったのか、というところまで掘り下げていくところから解き起こさねば、価値判断が普遍的に見えるということを批判しきれないと思うのですが。

それが異化の構造を探るということであり、その辺が物象化の問題ではないかと思うのです。

最初のKさんの「『吃音はあるのか、否か?』という問い掛けが何故必要か?」という質問の応えが、この辺に有るのだと思いますが、どうでしょう?

K 何かを問題にしようとしているのは分かりますが、「異化」とか「物象化」とか哲学的なことを言われても、その辺のところの説明をして貰わないとわからない。私は吃音というのはあると思う。

T 吃音というのは「もの」ではない。

K 「もの」ではないが、吃現象という状態としてある。M 認識論的なことに踏み込む前にちょっと一息いれませんか?

K 司会という立場をすっかり忘れてのめり込んでいました。

T いいんじゃないですか、のめり込んだほうが。形なんてどうでも・・・。

K では、ちょっと一息。

(つづく)